

第2章 武士の活躍と信仰



源平の争乱と紀伊国



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

平氏政権と紀伊国武士団

平安時代後半、武士が次第に勢力を伸ばし、1156（保元元）年に起こった保元の乱では、源氏・平氏の2大武士団が、大きな役割を果たしました。そして、源氏と平氏は対立するようになりました。1159（平治元）年、平清盛は熊野詣を行い、切目（一説に田辺の二川）に着きました。ここで清盛は、平氏を快く思っていなかった源義朝らが反乱を起こしたとの知らせを受けました。わずかな兵しかそばにいなかった清盛は、どうするか思案しました。この時、清盛を助けたのが湯浅党の宗重と、熊野別当湛快です。彼らの支援を得た清盛は、ただちに都に帰って反乱をしずめ、平氏政権を打ち立てることができました。

平氏は一族で朝廷の高い地位を独占し、武士でありながら貴族のように振る舞いをするため、朝廷・貴族・武士の中で、平氏に対する反発が強まりました。1180（治承4）年、後白河天皇の皇子以仁王が平氏打倒のため決起しましたが、それを平氏に伝えたのは田辺の湛増（湛快の子）でした。

諸国の源氏に平氏打倒の挙兵を呼びかける以仁王からの命令を届けたのが源行家です。行家は新宮で暮らしていたので、「新宮十郎」と呼ばれました。また、源義経の家来として有名な武蔵坊弁慶も、田辺出身と伝えられています。弁慶と源義経の話は有名ですが、その話の多くは確認されていなく、弁慶の一生は今も謎のままです。

湛増と熊野水軍

1180（治承4）年8月半ばに湛増は平氏を見限り、反平氏の兵を挙げました。湛増の軍は牟婁郡を越えて、有田郡と日高郡の境にある鹿ヶ瀬山まで兵を進めました。湛増の挙兵は、源頼朝や義仲の挙兵よりも



闘雞神社（田辺市）

早いものでした。湛増は戦いを起こし、実力で熊野三山を動かそうとしたのです。しかし、前から仲が悪かった弟の湛覚が城に立て籠って抵抗を続け、新宮の本家出身の別当範智も湛増の行動を支持しなかったため、湛増の作戦は行き詰まりました。1181（養和元）年1月ころから湛増は作戦を変えて、平氏の本拠地であった伊勢・志摩地方（三重県）に水軍を送り、ここで戦いを続けました。湛増の水軍に加わったのは、平氏支配の強まりによって自由を奪われた熊野の海で生

活する人々でした。戦いが有利になるにつれて、熊野三山での湛増の力が強まり、抵抗できるものはいなくなりました。新宮本家の跡取りと言われていた行命も平氏を頼って逃亡しました。そして湛増は、1184（元暦元）年に熊野別当に就任しました。

熊野三山を統一した湛増は、水軍を率いて源氏の軍に加わりました。しかしその時期は、屋島の戦いが終わった後の1184年のことです。熊野水軍の支援を得た源義経は、1185（文治元）年、壇ノ浦で平氏を滅ぼしました。湛増の行動について『平家物語』には、源氏につくか平氏につくか決めかねた湛増が、田辺に新熊野社（現在の闘雞神社）で、白い鶏（源氏の白旗の象徴）と赤い鶏（平氏の赤旗の象徴）とを闘わせて、白い鶏が勝ったことから、源氏の軍に加わったと記しています。湛増ははじめから平氏に反抗していますから、これは作り話と見られています。湛増と熊野水軍を味方につけ、壇ノ浦の戦いに勝利した源義経の手腕に、当時の人々が神の力を感じていたため、このような伝説が生まれたと考えられます。

平維盛伝説

源平の争乱にまつわる伝説と言え、平維盛の話があります。屋島の戦いの時に平氏の陣から脱出した平維盛は、父重盛の家来であった滝口入道をたずねて高野山に登り僧になった後、熊野へ参詣し、浜の宮王子（那智勝浦町）から船乗り入水したと『平家物語』に記されています。事実は、父重盛と親しかった湯浅党を頼って、維盛・忠房兄弟が紀伊国に逃れたようで、湯浅党は忠房をかくまい、源頼朝の命令を受けた湛増と戦っています。

源平の争乱では源氏につかなかった湯浅氏は、源頼朝と親しかった僧文覚のとりなしもあって、1185年には御家人となりました。一方の湛増ですが、平氏滅亡後、源頼朝と対立した義経・行家と親しかったためか、1194（建久5）年になって頼朝に許されました。



わかやまの知識



【道成寺縁起】

道成寺には、室町時代に作られたといわれる絵巻物『道成寺縁起』が残されています。絵巻物の詞書（絵巻物に書き添えられた文言）には、安珍と清姫の名はなく、奥州（東北地方）の若い美しい僧と牟婁郡真砂に住む清次荘司の女房となっています。

この物語の起こりは古く平安時代にさかのぼり、『大日本国法華経験記』や『今昔物語』などには「寡婦」「悪女」と書かれているだけで、安珍も鎌倉時代の『元亨釈書』には見えますが、その後に書かれた『道成寺縁起』には出ていません。

江戸時代になって、「御伽草子」や道成寺物とよばれる歌舞伎舞踏や人形浄瑠璃などが盛んになるとともに広がりしました。修行のさまたげとなる女性とその誘惑に負けた修行者のみじめな姿をえがいているのです。



道成寺縁起（江戸時代後期 和歌山県立博物館蔵）